

## 書 評

石原 潤 著：

『定期市の研究 機能と構造』

名古屋大学出版会 1987年6月

A5判 405ページ 6,500円

多年定期市の研究に専念されてきた石原氏がその成果をまとめ、意欲的に世に問われたのが本書である。

全巻4部12章、ほかに序論・結論・あとがき・文献目録・索引(人名・地名・事項)がある。

多年の研究を一書にまとめるにあたり、巻頭にそのテーマに関する研究史を掲げるのは先ず定石といってよい。しかし文献名の羅列にすぎなかったり、次章以下に展開される自らの研究との関係が密接でない場合も少なくないように見受けられる。そしてこの章が一書にまとめる際になってはじめて起稿される場合が多いようである。

本書にあっては第I部「定期市研究の意義と諸問題」がこれに当たるものであるが、他書とは大きく違う次の諸点が注目される。

①3章85ページ、全体の20%以上を占め、著しくそのウエイトが大きい。

②1章と2章は1968年に発表された論文をもととしている。これは氏の関連論文の中でもっとも早い年次のものである。氏は定期市の研究をはじめられた当初において、まず内外各分野の文献の蒐集と検討を徹底的にやられたのである。それはただ誰がどういふ論文を書いたかだけでなく、その論文ではどういふ課題がとり上げられ、どこまで明らかになり、どういふ見解を示しているかをきちんと整理されている。それによって、定期市研究にとって重要問題にどのようなものがあるかが明らかにされ、第II部以下に展開される研究課題が設定される。

定期市というものはわが国でも多くの地方に存在する。まずは手近のフィールドに飛んで行きたくなるのは山々であろう。その際において基礎的な文献研究にじっくりと沈潜された著者の姿勢には、敬服のほかはない。興のおもむくままに事例研究をやってきて、かなりの数になったので一書にまとめることにし、急拠研究史を書いたというのとはわけが違うのである。

③文献は章末でなく巻末に、引用順でなく筆者氏名のアルファベット順に配列される。研究史の章が

それだけ孤立するというのではなく、諸文献を全巻通して利用しようとの著者の姿勢が示されている。

④1章・2章以後に発表された内外の諸文献(当然著者自身のものもふくまれる)を整理し、課題ごとに到達点を検討されたのが第3章である。

以上の文献研究をもとに著者がなされるべき研究課題が定められ、その為の研究手法も明らかになる。著者がとられた研究方法は次の3点である。

①歴史的資料(古地誌・旅行記・古地図等)を用い、定期市の展開過程を明らかにする歴史地理学的研究。

②現代のセンサスや官撰地誌等の統計を素材とし、統計学的手法をも援用しながら、定期市の現況をエクステンシブに明らかにしようとする事。

③フィールドワークにもとづく現況分析、詳細な事例研究。

それらの対象地域として冷静な判断にもとずき、最適な所が選ばれた。すなわち、①としては世界でもっとも豊富な古地誌を残しており、それをわが国の図書館で利用可能な華北(第4章)と華中(第5章)、それに②・③との関係もあってインド(第6章)がとりあげられる。②としては、世界の発展途上国の中でこの目的に最適の資料がととのっているインド亜大陸が対象とされる(第7・8・9章)。また③のフィールドとしては、②の成果をふまえてバングラデシュ(第10章)とインド(第11章)、それに日本の事例として越後の場合(第12章)が取り上げられる。

おのおののページ数配分では、①すなわち第II部「定期市の展開過程」が3章81ページで20%、②すなわち第III部「定期市の分布と特性」が3章67ページで16%、③すなわち第IV部「定期市の実態」が3章107ページで26%を占めている。

405ページの本書は大著というべきであるが、驚かされるのはそのボリュームより密度の濃さである。既発表の論文を集めて一書にまとめるに当たり、主題とは縁遠いテーマの論文をも収録し、中には学術論文とは言い難い随想や紀行等まで収めてあるものも間々見受ける所である。著者の気持としては鶏肋棄て難くという所であろうし、読者としては気分転換となり、あるいは一服して楽な気持ちで読み進める章となる。本書においては文字通りの定期市の緻密

な研究以外の章はない。いずれもはっきりとした問題意識をもち、解決に迫ろうと気迫にもえた章ばかりで、慢然と知り得た事実を列挙しているような箇所はない。

定期市関係以外の論考を採録するどころか、著者の定期市関係の既発表論文の半分は割愛されて、本書には収められてない。いかに厳選され焦点をしぼったの著作であるかがわかる。

今後定期市の研究を志す人は、その専攻が人文地理であろうと他の学問であろうと、本書の精読からはじめねばならない事は確かである。本書の精読により、定期市研究の問題点と現在までの到達点を的確に把握することができる。一面、この方面を研究する気はないが定期市についてもちょっと学んでみようかという位の気持では、本書の通読はなかなか困難なことと言える。別の機会に豊富な研究経験をふまえて、誰にも気軽に読める定期市の解説書を出していただければ幸いである。

ある先輩から書評のコツというのを教わったことがある。7～8分通りはほめて、後の2～3分は「望蜀の感」として若干の苦言・注文をつけるのが良いとのことであった。実際そのように書かれている書評が多いし、その気積りで書くとき書きやすい。それが今回はできなかった。「望蜀の感」が見当たらないのである。強いて挙げれば文字通りの「無いものねだり」になるか、人間一人の能力の限界を超えたことを要求することになるからである。

定期市について多少は研究をしたことがある一人として、本書から多くのことを学ばせて頂き、研究の指針を与えて頂いたことを著者に感謝して筆をおく。  
(中島義一)

**山本正三・北林吉弘・田林 明 編著：**

**『日本の農村空間—変貌する日本農村の地域構造—』**

古今書院 1987年10月

A 5判 423ページ 5,800円

日本農村の社会的・経済的な構造が第二次世界大戦後、殊に1950年代後半以降に顕著になった経済の高度成長と急激な都市化の過程を通じて激変したということは誰しも周知のことであろう。農村あるいはムラの崩壊が言われて既に久しい。だが、一方では農村は変わらないとの見解も併存しており、農村の崩壊論や変動論に譲ろうとしない。これまた周知

のことに違いない。いずれが事実なのであろうか。

これは要するに農村の社会的・経済的な諸側面の一半を強調した観察結果からの一般化であって、双方とも事実の一半をいい当てているものと一応は解されよう。だが、いったい日本農村のどういう側面が変化（崩壊）し、何が不変なままなのだろうか。昨今は学界での農村研究が著しく不振であるために、このような疑問にすら容易に解答することが難しい状況にある。

確かに最近でも全国各地からの臨場感あふれる農村レポートや狭域的な調査報告の類はかなりの量がある。しかし、これらから農村変動の実体や今日の状況を一般化するのは躊躇すべきであろう。日本の農村と一口にいっても全国的にあまりに地域差がありすぎるからに他ならない。それは、ある側面に関しては今日ますます顕著になってきつつある。今日の農山村の実体を正確に認識するには、問題意識を絞った体系的・広域的な実体調査に基づいた研究がどうしても不可欠である。本書はそのような要望に応えてくれるであろう。本書は1950年代後半以降の日本の農山村は著しく変貌したという現実的な観点に立脚し、その変貌の主要因を農山村経済の都市化（非農業的な経済要素、つまり農外就業の浸透あるいはそれへの労働力の流出）と規定して、その実体を全国的に調査分析しようとした、実に気宇壮大な試みの成果をまとめたものである。

本書は大きく2部に分けて構成されている。「農村空間の諸類型」と題された第I部においては、全国および各地方の農村空間の詳細な区分が行なわれ、その実体が概説されている。それらの章と執筆者を列記すると、第1章 日本の農村空間〔山本正三・田林 明〕、第2章 北海道の農村空間〔山本正三・田林 明〕、第3章 東北地方の農村空間〔斎藤 功・斎藤一彰〕、第4章 関東地方の農村空間〔山本正三・斎藤 功・田林 明〕、第5章 北陸地方の農村空間〔山本正三・北林吉弘・田林 明〕、第6章 中央高地の農村空間〔赤羽 孝之・小林浩二〕、第7章 東海地方の農村空間〔宮崎 清・小林浩二〕、第8章 近畿地方の農村空間〔宮崎 清〕、第9章 中国・四国地方の農村空間〔内山幸久〕、第10章 九州地方の農村空間〔山本正三・石井英也・桜井明久〕となっている。

続く第II部は「農村の諸相」と題され、ここでは全国各地の農山村の実状が具体的に分析されている。